

# 関西地域のオペラ活動2019

大田美佐子

2019年は、台風による停電などはあったものの、自然災害で公演自体が中止になることはなく、大ホール、サロンオペラ、演奏会形式、大学など、様々な場所で、多様多彩なオペラ公演が展開された。2019年秋には、新たに地域を超えた文化の拠点になるような劇場が開場した。東大阪市の「東大阪市文化創造館」と堺市の「フェニーチェ堺」である。関西にはオペラ上演の拠点となっている優れた劇場文化があるので、今後の関西圏のオペラ公演のさらなる充実に、このふたつの劇場も大きな推進力となるであろう。

2019年の全体のプログラムを俯瞰して目を引くのは、同じ演目を異なる団体が上演することが重なった点である。たとえば、モーツァルトの《フィガロの結婚》は、1月にブラハ国立劇場オペラ（フェスティバルホール）により上演され、10月には関西二期会が、太田麻衣子演出、関西フィルハーモニー管弦楽団の演奏で上演した（兵庫県立芸術文化センター）。3月には、狂言風オペラとして、藤田六兵衛の脚本演出で、管楽八重奏版による《フィガロの結婚》\*が上演された（びわ湖ホールと大槻能楽堂、あましんアルカイックホール・オクト）。

また、チマローザの《秘密の結婚》は、4月に関西二期会恒例のサロンオペラとして、高木愛の演出によりピアノ版で上演され（ザ・フェニックスホール）、10月にはみつなかオペラが、オーケストラ版で牧村邦彦指揮、井原広樹演出により上演した。

このように、異なる演奏者、指揮者、演出によって同じ作品が上演されることは、聴衆を作品の多面的な理解に導き、オペラ文化の

新たな楽しみ方を提示できる。オペラがヨーロッパで「演出の時代」と言われるようになって久しいが、関西圏でもオペラ演出の重要性が理解され、古典オペラの多角的な楽しみ方が浸透してきた証左でもある。

関西圏の劇場と団体が、欧州の古典オペラに加えて、邦人作品の再演にも力を入れている点も特筆すべきである。たとえば、恒例となっているびわ湖ホールの林光作品《森は生きている》、関西二期会はザ・フェニックスホールで行なっているサロンオペラで別宮貞雄作曲《三人の女達の物語》（鈴木松子台本）と林光作曲《あまんじゃくとうりこひめ》（若林一郎台本）を取り上げた。堺シティオペラは、青島広志作曲《黒蜥蜴》（江戸川乱歩原作／三島由紀夫脚本）を上演した。作家の響敏也や指揮者の阪哲朗率いる大阪オペラ座は、尾上和彦のオペラ《月の影—源氏物語》を《ドン・ジョヴァンニ》と比較して一部を同時に上演したが、古典的な西洋のオペラと、日本のオペラを同時に上演する企画として、興味深いアイデアである。

また、地域を超えて連携したプロジェクトも、2020年のオリンピックに絡んで、さらにスケールが大きくなった。東京文化会館、新国立劇場が共同制作し、びわ湖ホールと札幌文化芸術劇場の地域を超えた劇場で、制作・提携されたオペラ公演では、中国が舞台のプッチーニの《トゥーランドット》が上演された。指揮は大野和士、演出はバルセロナ・オリンピック開会式の演出を手がけたスペインの前衛的なパフォーマンス集団の演出家アレックス・オリエが担当した。

また、ピッコロシアター大ホールで上演さ

れた関西二期会のオペラ研修所のモーツァルト作曲《皇帝ティートの慈悲》、ロームシアター京都で上演された小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XVII ビゼー作曲《カルメン》など、オペラの演者やオペラ文化の発展と育成を意識した公演もみられた。特に、小澤征爾が関東と関西で展開しているオペラ・プロジェクトでは、一部、小澤自身が指揮台に立ち、その往年の音楽に漲る気迫が健在と評された（メルキユール・デザール、能登原由実評）。オペラ公演は、歌手、指揮者、オーケストラなどの音楽家だけでなく、演出家、舞台装置、歴史家、組織運営など、多くの人々が関わり、地域の人材育成の面でも重要である。その演目は、学際的で知的好奇心を喚起し、地域の文化力も育む。このような人材育成と文化力をつなぐオペラ制作の重要な役割を、舞台芸術の展開にとどまらず、学校教育の現場とも接続し、若い表現者と聴衆を育てていくことは、地域を超えた大きな課題でもある。

2019年は、古典的なレパートリーから、ロックオペラ、日本のオペラ、そしてオペラからミュージカルへの接続を考えさせるような、ジャンル横断的な意欲的な上演も多かった。多様多彩な2019年の関西圏のオペラ活動について、以下の3点に整理して主な公演を報告する。その項目とは、Ⅰ. 関西を拠点に活動するプロの団体のオペラ活動 Ⅱ. プロと協働する市民オペラ Ⅲ. 展開するオペラの発信力：トランスナショナルとトランスカルチャーな試みについてである。

大きな団体の公演情報については巻末にデータが記されているので、省略する。また、関西地域のオペラ振興全体に関わる重要な点として、各種メディアで展開されている公演紹介記事、および批評活動を挙げておきたい。近年は、インターネットメディアも興隆し、舞台翌日に批評が出るなど、そのスピー

ド感の特筆に値する。また、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞などの大手新聞メディアの他、京都新聞、神戸新聞、大阪日日新聞など地域に密着した新聞、網羅的に関西の音楽界、舞踊界を活写し続ける専門的なメディアとして関西音楽新聞、全国の活動を網羅するウェブの音楽批評マガジン（「Mercure des Arts」<http://mercuredesarts.com>）などで展開されている批評活動が、オペラ振興を下支えしている点も強調しておきたい。

\*狂言風オペラ《フィガロの結婚》は巻末公演記録には採録していません。

## Ⅰ. 関西を拠点に活動するプロの団体のオペラ活動

関西のオペラ公演の中核を担うオペラ団体には、1964年創立の関西二期会、1949年朝比奈隆を中心に創立された関西歌劇団がある。関西圏で活動する演奏者を中心に組織されており、トップアーティストの多くが関西圏の大学で教鞭を取っていることから、関西圏の後進の指導、教育面でも重要な役割を担ってきた。

欧州のオペラハウスに倣って芸術監督を冠するびわ湖ホールや兵庫県立芸術文化センターでは、芸術監督がプロデュースを担うオペラ公演が行われてきた。2019年びわ湖ホール芸術監督沼尻竜典はリヒャルト・ワーグナーの「ニーベルングの指環」のツィクルスの第三夜《ジークフリート》、兵庫県立芸術文化センターの佐渡裕芸術監督はオペラ・プロデュースの枠組みで、レナード・バーンスタインのブロードウェイ・ミュージカル《オン・ザ・タウン》を上演した（Ⅲで後述）。例年同様、観客の知的な関心を深めるレクチャーやアウトリーチ活動も精力的に行われた。びわ湖ホールも兵庫県立芸術文化センターとともに、オペラにおいても戦略的に

小・中・大のホールを使用し、多角的なオペラ芸術の魅力を引き出している。加えて、びわ湖ホールでは演出家やオペラの指揮者を中心に、兵庫県立芸術文化センターではオーケストラなどを中心に、引き続きオペラ上演を担う次世代の人材育成にも力を入れている。びわ湖ホールも兵庫県立芸術文化センターも、海外から演出家を呼び、日本の歌手やスタッフと人的交流を深めるなど、プロダクション内部の国際性が豊かである。関西圏のオペラ公演では、個性豊かなシンフォニーオーケがピットに入る点が魅力的である。個性的な芸術監督のもと、戦略的なプログラムによって、オーケストラはそれぞれの音楽的アイデンティティを育てている。近年、一貫したプログラムでオペラ界でも注目を集めているのは、コンサートホールの空間で古楽のオペラ上演を展開するいずみホールである。それぞれのホールが積み重ねてきたアイデンティティ、顔が見えて地域に根ざしつつ、世界的な視野で注目されるオペラ上演は、オペラという芸術そのもののスケールの大きさを表している。

フェスティバルホールもオペラの上演場所として重要な役割を果たしている。2019年も海外の歌劇場の招聘公演を中心に、プラハ歌劇場のモーツァルト《フィガロの結婚》、ボローニャ歌劇場のロッシーニ《セヴィリアの理髪師》やヴェルディ《リゴレット》が上演された。《リゴレット》は、新しい批判校訂版を使用したマッテオ・ベルトラミーの指揮が賞賛され、「歌唱、音楽、舞台のいずれも、イタリア屈指の名門歌劇場の底力を見せつけた」（関西音楽新聞、横原千史評）と評された。また、第57回大阪国際フェスティバルでは、演奏会形式で、指揮者にシャルル・デュトワを迎え、大阪フィルハーモニー交響楽団がリヒャルト・シュトラウスの《サロメ》を上演し、デュトワと大フィルの健闘が讃えら

れ（メルキユール・デザール、藤原聡評）、「メルベートの絶唱と演奏 圧倒的な頂点を形成」（関西音楽新聞、横原千史評）と絶賛されている。

## 1. 関西二期会

関西二期会は、第91回オペラ公演で、モーツァルト《フィガロの結婚》（10月26日、27日／兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール）を上演した。

モーツァルトのオペラは、その現代化演出の歴史にも深い伝統があるが、今回のフィガロの結婚は、ずばり、一族郎党を連れての南国でのリゾート・ウェディングであった。演出は「現代化演出」の本場、ドイツ仕込みの太田麻衣子。グイード・マリア・グイェーダの指揮による関西フィルハーモニー管弦楽団は、快調なテンポ感とカンタービレで優美な響きで魅了した。南国風の村人の衣装など、演出はポストコロニアルを示唆し、政治的アイロニーを前面に押し出したハードな現代的な読み替えと思いきや、巧みに感性に訴えかける舞台でもあった。伯爵夫人の心象風景を空間の変容でも表現し、南国の人々の信心深さとその文化の開放感を、照明などの視覚効果を巧みに利用しつつ、フィナーレに向けてうまく展開させた。結果としてフィガロの世界を、その響きとともに、よりグローバルな視点から、身近な物語として新たに飛翔させることに成功した。アルマヴィーヴァ伯爵の片桐直樹、伯爵夫人の白石優子、スザンナの松浦優、ケルビーノの中西千尋など、世代の異なる芸達者な演者たちが光り、モーツァルトの「声」が描く人物の個性が時代を超えて「普遍」であることをあらためて明らかにした。

ザ・フェニックスホールで行われる恒例のサロンオペラはピアノ版で、春と夏、それぞれ2日間ずつ上演された。演目は、第18回サ

ロンオペラではチマローザの《秘密の結婚》(指揮：袖岡浩平／演出：高木愛)、第19回では別宮貞雄の《三人の女達の物語》と林光《あまんじゃくとうりこひめ》(ともに指揮：袖岡浩平／演出：藪川直子)が上演された。ピッコロシアター大ホールで、オペラ研修所第54期生修了公演として、モーツァルト《皇帝ティートの慈悲》(原語上演・字幕付き)が昼と夜の部の2回、上演された(指揮：粟辻聡／演出：唐谷裕子／ピアノ伴奏による上演)。

## 2. 関西歌劇団

関西歌劇団 第100回定期公演(9月21日、22日／あましんアルカイックホール・オクト)の演目は、2020年のオリンピック・イヤーを想起させるベルゴレージ《オリンピアアデ》。国内でも上演される機会が少ないバロック時代のナポリ派の作曲家、ベルゴレージに挑んだ意欲的な上演であった。演出は井原広樹、演奏は指揮の本山秀毅率いるザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団。リュートに笠原雅仁とチェンバロの岡本佐紀子を迎えた。ダブル・キャストによる上演。ホールの特性を活かし、ギリシャ神話の世界を舞台上に作り上げ、巧みに物語の世界に誘った公演では、複雑に交差する人間関係のなかでも、アリストテア役の松浦綾子の好演が賞賛された(関西音楽新聞、吉村麻希評)。恒例のスプリングオペラでは、メノッティ《アマールと夜の訪問者》(ピアノ版)を上演した(5月17日／兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール／演出：清原邦仁／ピアノ：關口康祐)。

## 3. びわ湖ホール

びわ湖ホールは自主制作オペラが大小合わせて数多く、近畿全域のみならず、全国からその上演と活動が注目されている公立劇場である。芸術監督の沼尻竜典を中心に、2019年

も活発に様々なタイプのオペラの上演が展開された。初心者にも魅力的にオペラの楽しみを紹介する「オペラへの招待」「沼尻竜典オペラセレクション」や玄人肌のワーグネリアンたちをも納得させる指環のツィクルスなどの企画には、日本オペラ界に重責を果たすびわ湖ホールの気概を感じる。また、オペラ文化の人材を育てる事業、広域の劇場とのオペラ制作の連携など、積極的に国の中核劇場としての役割を果たしている。2019年の芸術監督の沼尻竜典によるオペラ指揮者セミナーは、《魔笛》指揮法について行われた。また、2019年には、東京文化会館、新国立劇場、札幌文化芸術劇場と広域で提携したオペラ公演《トゥーランドット》を上演した。

1月の「オペラへの招待」では、林光作曲・台本のオペラ《森は生きている》(原作：サムイル・マルシャーク／訳：湯浅芳子／演出：中村敬一／美術：増田寿子／指揮・ピアノ：寺嶋陸也／管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団)が上演された。びわ湖ホール声楽アンサンブルと、平成28年から30年まで県内各地を巡演した時に出演した「森は生きている」合唱団が出演した。

中核となる沼尻芸術監督のプロデュースオペラは、「びわ湖リング」と称される存在感を放つ。ミヒヤエル・ハンペの原作の意図を忠実に掘り下げる演出、ヘニング・フォン・ギールケの幻想的な美術で、ワーグナーの「ニーベルングの指輪」のツィクルス第3夜の《ジークフリート》が上演された。物語が対話で進むこのオペラの主役は、沼尻竜典指揮の京都市交響楽団の存在であり、ライトモチーフにシンボルや説明を超えた、壮麗でダイナミックな響きを与えた。回を重ねるごとに、ツィクルス完結が楽しみになる歴史的な大プロジェクトといえる。

#### 4. 兵庫県立芸術文化センター

阪神淡路大震災からの復興で、芸術による精神的な豊かさを目指し開場されたこの劇場は、関西のオペラ振興にも大きな貢献をしてきた。2019年は春の恒例になった、日本のオペラ振興に取り組む「日本オペラプロジェクト」では、びわ湖ホールとの連携で、林光作品《森は生きている》を取り上げた（阪急中ホール）。室内オーケストラ版を、寺島陸也が指揮とピアノ、兵庫芸術文化センター管弦楽団のメンバーで上演した。毎夏の恒例となった佐渡裕プロデュースオペラは、レナード・バーンスタイン生誕100年を祝したクライマックスとして、バーンスタインの初めてのブロードウェイ・ミュージカル《オン・ザ・タウン》を上演した。フルオーケストラでの舞台上演版としては今回が日本初演であり、開場以来蓄積してきたオペラ制作のノウハウをミュージカルに展開し、兵庫県立芸術文化センターオリジナルの《オン・ザ・タウン》を発信した。（Ⅲで詳述）

#### 5. いずみホール

いずみホールは、住友生命保険相互会社により計画され、1990年にウィーンの楽友協会ホールにインパクトを受けて作られた民間のコンサートホールである。しかし、ホールオペラと題して、演奏会形式やモノオペラなど、いずみホールならではの独自の視点でオペラ上演の実績も積み上げている。開場以来、2018年までホールの館長を務めた音楽学者、故礒山雅の理念がホール運営と結実した成果は、そのプログラムにも表れているといえるだろう。2019年には、セミ・ステージ形式で、クラウディオ・モンテヴェルディのオペラ《ポッペアの戴冠》とラモーのオペラ・バレ《ピグマリオン》が上演された。ポッペアは全キャスト日本人の上演、渡邊順生指揮の住友生命いずみホールのメンバーによる

卓越した演奏、ポッペア役の阿部雅子の好演が特に評価され、「17世紀半ばのヴェネツィア発オペラの味わいをおおいに堪能させてくれた。半音階進行の官能的な音程感、不協和音・協和音の相互のかけひき、レチタール・カンタンドの流れ、そしてチャッコーナも含むダンスなどのリズム感、その機微に会場は酔いしれた」（メルキユール・デザール、三島郁評）。

ラモーのオペラ・バレ《ピグマリオン》の公演は二部構成。一部はオランダを拠点に活躍する寺神戸亮率いる「レ・ボレアード」の演奏で、バロックダンスが当時の日常の所作の美学から発展したものであることを実演で解説した。本編では演出の岩田達宗の発想が冴え、柔らかなハイトーンボイスで魅了するピグマリオン役のクレマン・ドビューヴル、愛人セフィーズを演じた波多野睦美の妖艶な声の存在感などの声とともに、見えぬ心情をコンテンポラリーダンスとバロックダンスの両方で示した。神々と民衆、概念と実体など、一見相反する様々な要素が交流し、最後には合唱とともに全員のコントロールダンスが披露された。時代を超えた現代の《ピグマリオン》からとらわれなき世界を表現したバロックオペラの自由な精神が表象された。元来、関西は古楽演奏が盛んな地域ではあるが、いずみホールの公演は、全国的にも注目される上演となった。

#### 6. 大阪音楽大学 カレッジオペラハウス

創立百年を超える関西の名門音楽大学のオペラハウスも、人材育成と作品紹介で関西オペラ界に大きな役割を果たしてきた。特に、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団は、関西圏のオペラ上演にとっての存在が大きい。第55回オペラ公演は、ベッリーニの歌劇《カプレーティとモンテッキ》であったが、それでも牧村邦彦の指揮によるザ・カレッジ・オ

ペラハウス管弦楽団のドラマの深い理解に基づく演奏は特筆に値した。演出は岩田達宗である。ロメオとジュリエットを翻案とするこの作品の時代を現代にも通じる普遍的な抗争として読み替え、黒、赤、白を基調にした舞台上に「人間の怨恨、血、死の世界と言うべきものを表象させ、このオペラが累々たる死者の上に成り立つという悲劇性を巧みに表現した」(関西音楽新聞、村田英也評)。

## II. プロと協働する市民オペラ

世界的なスターに頼ることなく、それぞれの地域の音楽家を中心に、地域とともに歩み、その活動が根づいた市民オペラの存在感は、音楽クリティック・クラブ賞や数々の受賞からも、関西のオペラ界が誇る特質である。どの舞台もレベルが高く、堺シティオペラやみつなかオペラなどは、演目の選択という視点からも、地域に根づき、世界に発信する価値のあるグローバルなレベルで公演を展開している。伊丹市民オペラは、2019年3月24日に、東りいたみホール(伊丹市立文化会館)大ホールで、ヴェリズモオペラの定番2作品、《カヴァレリア・ルスティカーナ》と《道化師》を上演した。演出は井原広樹、指揮は加藤完二、演奏は伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団、合唱は伊丹市民オペラ合唱団、児童合唱は伊丹市少年少女合唱団。芦屋市民オペラは、プッチーニの《トゥーランドット》を原語上演で、2019年2月3日にダブルキャストで2公演を上演した。管弦楽は、市民オーケストラの芦屋交響楽団、合唱は芦屋合唱協会、芦屋市民オペラ合唱団、芦屋少年少女合唱団による(会場:芦屋ルナホール/指揮:松浦修/演出:木川田直聡)。以下に、堺シティオペラ、みつなかオペラ、オペラde神戸の公演記録について報告する。

### 1. 堺シティオペラ

第33回定期公演では、江戸川乱歩原作、三島由紀夫脚本による青島広志のオペラ《黒蜥蜴》が上演された。《黒蜥蜴》は20回もの再演を続けてきた作品ではあるが、関西では初演。ミステリー作品とオペラの親和性も魅力的であった。

緑川夫人は美輪明宏の当たり役で、黒蜥蜴は演劇史にも異彩を放つ存在だが、その妖気溢れる女泥棒「黒蜥蜴」とは別の魅力を、管弦楽と声の表現を通して再発見する贅沢なプロセスである。特にこの作品では作曲家、青島広志一流のハイブリッドな音楽劇のセンスが光っている。古典からポピュラー音楽までの名曲のエッセンスが、様々な音楽形式とともに劇的、心理的な効果をもって鳴り響き、劇を前へと進める。クラシックを超えてヴァイルや林光の音楽劇など、クロスオーバーな作品を歩哨してきた青島の音楽の厚みを感じた。演出は堺シティオペラの常連でもある岩田達宗。衝立と光の透過性をうまく利用し、空間の移動を整理した装置から、登場人物の声や音楽が観客によく伝わるという、音楽劇として手慣れた演出。演奏の柴田真郁指揮、大阪交響楽団も、青島の多彩な音楽性を見事に掘り起こした。

また、初日の緑川夫人を演じた渡邊美智子の圧倒的な存在感が光った。緑川夫人といえ、自分勝手な死の美学をもつ犯罪者、強烈な個性を放つ魅力的で孤高の存在。その主人公を異界の魔性としてではなく、艶やかに豊潤な歌声で「血の通う女性」として、演劇版とは別の魅力をもつ人物像を発掘した。

青島広志作曲《黒蜥蜴》(江戸川乱歩原作による三島由紀夫作) / 2019年2月2日(土) 15:00開演, 3日(日) 14:00開演 / 会場:堺教育文化センター(ソフィア・堺) / 主催:堺シティオペラ(一社) / 指揮:柴田真

郁／演出：岩田達宗／管弦楽団：大阪交響楽団／照明プランナー：原中治美／衣裳プランナー：下斗米大輔／音響：平井英一／美術プランナー：野崎みどり／緑川夫人：渡邊美智子、並河寿美／明智小五郎：福島勲、山岸玲音／雨宮潤一：総毛創、森寿美／岩瀬庄兵衛：片桐直樹、井原秀人／岩瀬早苗：西田真由子、金岡侑奈 など

## 2. みつなかオペラ

1991年に「川西市民オペラ」として発足、1996年にみつなかホールが開館して以来、みつなかホールを拠点に活動し、2007年に独自性と上質なオペラの提供を目指して「みつなかオペラ」と改称した。演出家や声楽家、指揮者らで構成されるみつなかオペラ実行委員会によって運営されている。2019年はドメニコ・チマローザ（1749～1801）のオペラ・ブッフア《秘密の結婚》を上演した。芸達者な演者たちにより、観客にとっても伝わりやすく、親しみのある舞台が評価された。「笑いに厳しいといわれる関西で、それもオペラで、こんなにも笑い溢れる舞台となった要因は、なんといってもオペラである事を忘れるような歌手達の丁々発止の絶妙な間の取り方と、それに追従する日本語訳字幕の言葉選びの巧みさの両輪がうまく廻ったことだろう」（関西音楽新聞、吉村麻希評）。

チマローザ作曲《秘密の結婚》2019年10月5日（土）16:00開演、6日（日）14:00開演／会場：川西市みつなかホール／指揮：牧村邦彦／演出：井原広樹／合唱指揮：岩城拓也／装置：アントニオ・マストゥロマッティ／照明：原中治美／音響コーディネイター：小野隆浩／衣裳：村上まさあき／管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団／チェンバロ：高崎三千／合唱：みつなかオペラ合唱団／ジェロニモ：井原秀人、片桐直樹／エリ

ゼッタ：平野雅世、並河寿美／カロリーナ：内藤里美、坂口裕子／フィダルマ：大賀真理子、尾崎比佐子／ロビンソン伯爵：西村圭市、迎肇聡／パオリーノ：中川正崇、松本薫平

## 3. オペラde神戸

市と市民が一体になるイベントの第3回公演は、2020年には兵庫県立芸術文化センターでも上演される予定の《ラ・ボエーム》を上演した。

プッチーニ作曲《ラ・ボエーム》（全4幕・イタリア語上演・字幕付き）／2019年3月2日（土）15:00開演、3日（日）14:00開演／会場：神戸文化ホール大ホール／主催：神戸市、（公財）神戸市民文化振興財団／プロデュース：井上和世／指揮：粟辻聡／演出：井原広樹／管弦楽：神戸市室内管弦楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団／美術：増田寿子／照明：原中治美／衣装：下斗米大輔／音響：小野隆弘／合唱：オペラde神戸合唱団（合唱指揮：岩城拓也）／児童合唱団：須磨ニュータウン少年少女合唱団（児童合唱指導：増田健一）／ミミ：並河寿美、平野雅世／ロドルフォ：藤田卓也、松本薫平／マルチェロ：池田真己、伊藤友祐／ムゼッタ：内藤里美、喜多美幸 など

## Ⅲ. 展開するオペラの発信力：トランスナショナルとトランスカルチャーな試み

「オペラ」とひとくちに言っても、その上演の世界は幅広く、作品の出自も多様である。一見、オペラ公演とは一線を画す公演であっても、様々な点からオペラ文化との接続と展開を予見させるプロダクションがある。洋楽史の観点から、日本のオペラ界に大きな影響を与えてきた浅草オペラなども、当時必要とされたオペラの日本化を通じて、オペラ文化を日本の観客に浸透させた。兵庫県立芸術文

化センターの佐渡裕プロデュースオペラの枠組みで上演されたレナード・バーンスタインの《オン・ザ・タウン》(1944年初演)\*は、バーンスタインにとって「ブロードウェイ」でのデビュー作でもあり、ジャンルとしては「ミュージカル」ではある。しかし、兵庫芸術文化センターの上演では、原語上演で、演出にオペラ演出家でもあるアントニー・マクドナルドを迎え、オペラやオペレッタの歌唱法の影響が大きかったころのブロードウェイのミュージカルを彷彿とさせ、スコアの隅々までを鳴り響かせた「ミュージカルのスケールを超える」極上のシンフォニック・サウンドで観客を魅了した。その背景には、ミュージカルとオペラの世界を繋いできた歴史をもつロンドンのウェスト・エンドとの協働も大きい。バーンスタインのオリジナルに秘められていたものの、発掘されてこなかった響きの可能性のひとつが示された公演でもあった。同時期に、宝塚大劇場で宝塚歌劇月組でも取り上げられ、聴衆がこの作品の多面的な魅力を理解するには絶好の機会を提供した。20世紀や21世紀のオペラには、ジャンル横断的な作品も数多い。オペラ歌手がミュージカルを歌う機会も増えてきた。世代を超えてオペラ文化を発展させるためには、「オペラ」とは何を指すのか、セクショナリズムに陥るより

も、より柔軟な感性で、あらゆる角度からオペラの可能性を探究していくことも必要ではないか、と感じている。

バーンスタイン作曲《オン・ザ・タウン》(全2幕・英語上演・字幕付き) / 2019年7月12日(金)～15日(月・祝), 17(水)日, 19日(金)～21日(日) 各日14:00開演 / 会場: 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール / 主催: 兵庫県, 兵庫県立芸術文化センター / 指揮: 佐渡裕 / 演出: アントニー・マクドナルド / ムーヴメント・ディレクター: ルーシー・バージ / 装置・衣裳デザイン: アントニー・マクドナルド / 照明デザイン: ルーシー・カーター / 振付: アシュリー・ペイジ / 合唱指揮: 矢澤定明 / 合唱: ひょうごプロデュースオペラ合唱団 / 管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 / ゲイビー: チャールズ・ライス / チップ: アレックス・オッターバーン / オジー: ダン・シェルヴィ / アイヴィ: ケイティ・ディーコン / ヒルデイ: ジェシカ・ウォーカー / クレア: イーファ・ミスケリー

\*兵庫県立芸術文化センターの《オン・ザ・タウン》は巻末公演記録には採録していません。